

授業探訪

総合系科目・多彩な学び（立教サービスラーニングセンター提供科目）

「SDGs と現代社会の課題とその関わり方入門」 教室の外の世界とつながる授業をめざして

立教サービスラーニングセンター特任准教授 中沢 聖史

教室と外の世界の間にある壁

立教サービスラーニング (RSL) センターは、2016年の開設以来、「社会の現場も教室として捉える」を理念とし、学生とキャンパスの外で起きている社会課題とをつなぐ授業を展開している。これは、学生が特定の学問領域について専門的に学ぶだけではなく、在学中に社会で現実には起きている問題に触れ、将来、大学で修めた学びを課題解決の実践的なツールとして活用してほしいという期待があるからである。

こうした理念に基づき、RSL センターの実践系の科目では国内外のフィールドに学生を連れ出し、キャンパスの中ではなかなか接点がない人々やコミュニティとの関わり合いを通して社会課題について学んでいる。一方、講義系の科目の場合、どのように教室の外の世界とつながるかが大きな課題となる。本稿では、RSL センターで開講している講義系科目「SDGs と現代社会の課題とその関わり方入門」を事例に、教室の中しながら社会課題を「自分ごと」として捉え、主体的に関わる姿勢を育むための取組について紹介する。

「SDGs と現代社会の課題とその関わり方入門」は RSL センターで開講する科目の中でも特に履修生が多く、約 300 名が受講している。SDGs が学習テーマなので、講義の中では国際社会でいま現在起きている様々な社会課題を扱うこととなる。RSL センターで開講するすべての科目で、学生を学習テーマに関する「現場」に引率できれば理想的だが、一度に引率できる人数は限られている。また、フィールドによっては物理的な距離の問題や、移動にかかる費用、安全面の課題なども生じる。こうした事情から、講義系科目では教室の中からキャンパスの外の世界を見つめることになる。ではどうやって社会課題の現場に行かずして、教室の外で起きていることをリアルに感じてもらうか。

映像教材を使って、その場所の様子を視覚的に捉える。

活動に従事している人をゲストとして教室に招く。

いろいろな方法を実践してきたものの、いざ授業をおこなってみると、教室の外で起きていることについて、学生にその現場の空気感を伝えることは非常にむずかしいこと

がわかる。どんなに詳細にフィールドの様子を伝えても、映像や写真をスクリーンに投影しても、それはどこか対象化された、ここにいる自分と切り離された物語のように感じてしまうからだろう。教室と、その外で起きている出来事の間には大きな隔たりがあり、社会課題と自分との接点を積極的に見出すことは想像以上にむずかしいことだと感じた。

自分と社会のつながりを探るための仕掛け

「SDGs と現代社会の課題とその関わり方入門」を担当して3年目となる今年度、新たに導入したことのひとつは席のシャッフルである。履修生は入室するとまずカードを1枚ひいて、そこに書かれている番号の座席に着席する。RSL科目は全学共通科目という特性上、教室の中には様々な学部の子生がいる。300人近い履修生がいれば、講義内の意見交換を通して学生が自分と異なる多様な視点や主張に触れることができるという意味で、定員が少ない実践系の科目とは違う利点があると考へていた。しかし、最初の2年間で発見したことは、300人近く履修生がいても、意見交換をする相手は毎回変わらないことが多いということだった。私が担当する講義系科目は、履修生の多くが毎回ほぼ同じあたりに着席し、友人と連れ立って教室にくる学生はたいてい隣同士で座るため、意見交換の時間を割いても、毎回同じ人と言葉を交わすこととなり、定員が多い全学共通科目という特性を活かしきれていないことに気づいた。そこで、上述のような席のシャッフルを定期的におこない、「これまでに話したことがない隣人」を定期的に授業の中でつくることにした。学生からは「違う学部のひとの意見が聞けて新鮮だった」、「普段接点がない学年のひとの意見に刺激を受けた」などのリアクションがあった。授業に取り入れたもうひとつの工夫は、教室内のスクリーンを活用した、学生の意見や質問の全体共有である。授業中に学生が意見交換する相手は、自分が座っている前後左右の人に制限されてしまい、そこで行われた議論を教室全体で共有することは困難である。そこで、意見交換をした後に、教室のスクリーンにQRコードを表示し、学生がそれを読み取って議論の要約をテキストで打ちこめるようにした。打ち込んだ文章は教室のスクリーンに投影され、離れた場所に座っているグループの意見も可視化した。これにより、自分のグループの意見交換の中では触れられていなかった視点も獲得できるようになった。ふたつの工夫はいずれも、最終的に自分の意見と向き合うための仕掛けとして導入した。講義の中で教員が社会課題を解説し、学生がそれを情報として受け取って授業が終わるのではなく、学生自身がその社会課題とどのようにつながっているかを積極的に探求し、社会の一員である自分がその事象に対してどのような意見を持っているのかを掘り下げたりする機会を創ることをめざした。その上で、毎回授業の最後に書くリアクションペーパーでは、自分の考へと向き合い、それを言語化する時間を設けた。

リアルタイムでキャンパスと海外を結ぶ中継

社会で起きていることをより身近に感じてもらうための取組として、今学期はリアルタイムでキャンパスと海外を結ぶ中継にも挑戦した。

2024年10月10日の授業では、池袋キャンパスの教室とパレスチナ自治区東エルサレムを中継でつなぎ、避

難民を含む現地住民の支援活動に従事する日本人のNGO職員に教室からインタビューをおこなった。この日は世界の紛争と難民問題について学ぶ回であり、武力衝突から始まったイスラエル軍によるガザへの軍事侵攻が激化し、多くの市民が避難民となっており、ちょうど1年というタイミングでもあった。オンライン会議システムを使って教室のスクリーンに中継先を投影し、エルサレムの現在の時刻や天気、いま窓の外に見える景色など簡単な質問に回答してもらった後、まずは現地の避難民の生活や支援活動の内容について紹介してもらった。時折、登壇者から「教室のみなさんはどう思いますか」という問いかけがあったり、また学生からの質問を交えたりしながら進行することにより、あらかじめ編集されたビデオ教材ではつくれない双方向性を生み出した。たとえば、ガザで起きている問題に対して、中継先からは「いま日本にいる自分たちは何ができるのか」という問いかけをしてもらい、学生たちは教室内での意見交換の後、上述のシステムを使って自分たちのアイデアを教室のスクリーンに投影した。スクリーンに映し出されるテキストを教室にいる学生と中継先の登壇者がともに見つめながら、登壇者が現場の事情を踏まえてひとつひとつコメントを返してくれるというような形で、物理的に距離が離れている地域、そして武力衝突という身近に感じづらい問題に接点を見出すことができたのではないだろうか。

また、11月28日にはフィリピンのミンダナオ島のカミギン州と中継をつないだ。授業の前半は、日本を拠点に開発途上国の教育支援をおこなうNGOの職員に教室で話してもらい、教育にアクセスしづらいフィリピンの農村部と都市部との違いについて講義をおこなった。その後、ミンダナオ島のカミギン州と中継をつなぎ、同じNGOの現地スタッフが街歩きのような形で中継をおこなった。凹凸した道路や、細く入り組んだ路地、市場の喧騒や日本では見慣れない商品の陳列棚などを視聴することで、スタディツアーさながらの疑似体験を得ることができた。この日も、教室と中継先の間で意



見交換や質疑応答をおこなった。市場の中で無造作に並べられている精肉が画面の片隅に映った際には、「冷蔵されずに売り場に置かれている肉が傷まないのか心配」というコメントが複数投影され、教室では笑い声が上がった。



講義系科目では、実践系科目とは異なり、

実際の場所を訪れて景色を目にし、人々の暮らしを体験しながら社会課題に触れるという体験が得られない。そのため、授業で海外の紛争や自然災害、貧困や飢餓などの問題を授業で扱う際、対象国のイメージが断片的な情報に偏ってしまうことがある。このような状況において、現地からの中継は、街並みや日常生活の様子も同時に伝えることができ、その地域について多角的に理解を深める有効な手段となるのではないだろうか。

サービスラーニングを座学でおこなう難しさと今後の展望

立教サービスラーニング (RSL) の定義

社会の現場での活動と、教室における学問的な教育との結合を目指す実践型の教育プログラムの一形態であり、正課科目として展開しています。さまざまな分野で現場の専門機関の指導のもと、学生たちは一定期間の社会的活動等を行い、その実践と理論的学習を統合することで、単位が付与されます。

上記の定義が示すように、サービスラーニングとは本来、フィールドでの活動を伴う教育手法である。しかしながら、RSL センターでは教室内の学びで完結する講義系科目も開講しており、「SDGs と現代社会の課題とその関わり方入門」もそのひとつである。科目名が示しているように、この授業では学生ひとりひとりが社会課題にどのように関わることができるか模索する姿勢を重視しているが、大教室でおこなう講義科目という性質上、どうしても「一方通行」や「受け身」の形式に陥りやすく、毎回の講義が社会課題の紹介と解説にとどまってしまうことが課題である。QR コードで意見や質問をスクリーンに投影することや、リアルタイムでキャンパスの外と中継を結ぶことは、履修

している学生の能動性を引き出し、社会課題と自分との距離を縮めることに一定の役割を果たしているように感じる。4年目となる来学期もこうした工夫を継続するとともに、教室の中から、キャンパスの外にまなざしを向け、学生が積極的に自分と社会とのつながりを見出し、関わるきっかけとなるような授業のあり方を追求したい。

なかざわ さとし